



ちひろのアトリエ -東京・黒姫-

●2013年9月20日(金)~11月30日(土)

いわさきちひろにとって、アトリエは仕事場であると同時に絵と多くの人と世界を繋ぐ、大切な場でした。アトリエの変遷は、画家ちひろの人生とも密接に結びついています。本展では、東京・練馬と後年信州・黒姫に建てたアトリエの復元や資料、作品を通して、ちひろの創作の舞台裏を探ります。

敗戦直後の1946年、絵を学ぶために松本から東京に単身上京し、神田にある叔母の家の屋根裏部屋に住むようになったちひろは、この自画像(図1)でキャンバスを立てたイーゼルをバックに、スモックを着て机に伏しています。同じ部屋に共に寝起きた従妹の中村澄子に、ちひろは絵の悩みなどを打ち明けていたといえます。

松本善明との結婚、そして長男猛の誕生の後の1952年春、家族が共に暮らせる新居が練馬区下石神井(現・ちひろ美術館・東京所在地)に完成しました。十五、六畳の居間の一角に小さな机と椅子を置いて、ちひろは絵を描いていました。「いろいろな部屋に兼用しているこの仕

事場(アトリエとは言い難い)」というちひろの言葉通り、居間は、幼い1人息子や友だちの遊び場であったり、お客さんを迎える応接室であったりしました。いつも背中の子にいた猛や、駆け出し



の弁護士である若い夫を支えるためにちひろは、紙芝居、広告、絵雑誌、児童文学全集など、さまざまな仕事をこなしていきます。「主人のため子供のためかせぎ働きすぎ、自分の絵をだめにしてしまった。」と悩むときもありましたが、ちひろは次第に世の中に認められてゆき、息子と同じ年代の男の子を主人公にした初めての絵本『ひとりのできるよ』(福音館書店)を出版します。(図2)

1963年、夫の両親を家に迎えるため増築した折、二階に独立したアトリエが設

けられました。大所帯のなかで大変ながらも、ちひろは「そのなかで絵が生まれる」と語っています。

3年後の1966年、ちひろは長野県北部の黒姫高原に、山荘を兼ねたアトリエを建てます。山や木々に囲まれ、東京での日々の喧騒から離れたこのアトリエで、ちひろは「若い人の絵本」シリーズなど、何冊もの絵本を描きました。『あかまんまとうげ』(童心社)は、黒姫山と形が似た山(図4)が描き込まれるなど、高原の春の息吹が感じられる一冊です。

「赤いシクラメンの花は きょねんもおととしもそのまえのとしも 冬のわたしのしごとばの紅一点」で始まる絵本『戦火のなかの子どもたち』(図5)は、ちひろが、初めて息子猛とともに完成させた最後の絵本です。ベトナム戦争に心を痛め、ちひろはシクラメンを見つめながら、自らの戦争体験と重ねて遠い国の子どもたちの将来を我がことのように案じ、何ができるかと考え描きました。小さなアトリエで大きな志を持ったちひろの世界をご覧ください。(松方路子)

ちひろ美術館コレクション 画家たちのアトリエ

●2013年9月20日(金)~11月30日(土)

協力：株式会社福音館書店

「私にとってのパラダイス」(ジャン・ギョクニル/トルコ)、「アトリエとは、舞台である」(于大武/中国)など、アトリエは、画家にとってさまざまな意味を持ちます。アトリエからは、「仕事場」であるとともに、創作のインスピレーションを生む場でもある画家の好みや、技法の工夫を知ることができます。

スズキコージの魔法の世界

初公開のスズキコージの『『やまのディスク』のイメージ』(図1)は、縦横約2mの大作です。しろうまのみねこさん、やぎのさんきちくんといった絵本『やまのディスク』の登場動物たちが、目の覚めるような鮮やかな大画面いっぱいに踊り狂っています。一部、ライブペイントで描かれたこの作品には、にぎやかな音楽が大音量で聞えてくるような迫力と臨場感があふれています。画家自身「魔法画」と呼ぶスズキコージの作品には、湧き出るエネルギーと魔力のようなものを感じますが、そのアトリエも、スズキコージの絵の世界のよう。画材にまじって、スズキコージが描いた絵やペイ

ントされたモノがあり、魔法使いの部屋のような、妖しげな雰囲気を感じ出しています。(写真①)

画家らしさのみえる場所

ビネッテ・シュレーダー(写真②)

アトリエから見える景色や部屋に置かれたなにげない小物には、その画家らしさが垣間見られます。ドイツのシュレーダーの作品は、美しいグラデーションの深い青や緑が印象的です。(図2)その色彩は、アトリエの机に面した大きな窓から見える青々とした緑に重なります。机上には、貝がらや水晶、おもちゃのバッタ……、さまざまなものが並び、あたかも現代美術の作品のようです。

集めた小石に細工を施し、顔に似せることもあるというシュレーダー。不思議な物語の世界を描く、画家ならではのアトリエです。

エンリケ・マルティネスとハバナの地

部屋という空間だけではなく、アトリエのある地も、画家には大切です。マル

ティネスは、キューバのハバナにアトリエを構えています。アトリエ自体は、机ひとつの小さなものといいますが、バルコニーから眺めるハバナの人々や海、防波堤といった景色が、作品を描き続けるよい刺激となっていると語ります。(写真③)マルティネスは、自由な発想と繊細かつ大胆な筆使い、ときにボール紙の断面までも駆使して、不思議な動物を描きます。(図3)ハバナという地そのものが、マルティネスのダイナミックな表現の源なのでしょう。

本展では、長野県の青木村にアトリエがあった瀬川康男、チェコに暮らし、東欧の空気を作品に描き出す出久根育(図4)、韓国の伝統的な画法で描くパク・チヨルミンなど、約20の国、約30人の画家による約80点を、アトリエの写真や画材などとともに紹介します。

アトリエで、想像の翼を広げ、絵本の世界へと飛び立つ画家たち。作品の舞台裏を見ることで、画家や作品をより身近に感じていただければ幸いです。

(柳川あずさ)



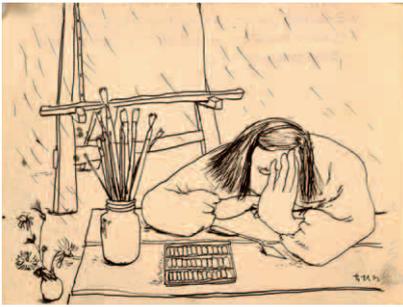


図1 顔を覆う自画像（屋根裏のアトリエにて）
1947年頃



図2 『ひとりできるよ』（福音館書店）1956年



図3 紙芝居「お月さまいくつ」（童心社）より1958年



図4 『あかまんまとうげ』（童心社）より
1972年



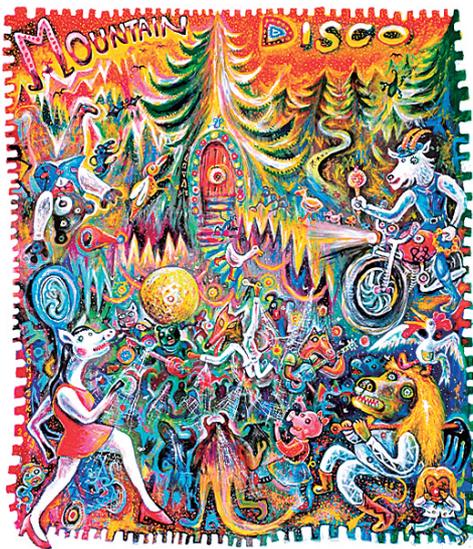
黒姫高原のアトリエにて 1971年



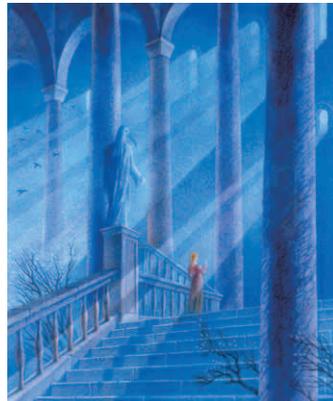
東京のアトリエにて息子
猛と 1973年



図5 『戦火のなかの子どもたち』（岩崎書店）より 1973年



(上) 図1：スズキコージ（日本）『やまのディスコ』のイメージ 2013年
(下) 写真①：アトリエのスズキコージ
撮影：吉原朱美 「母の友」2007年9月号（福音館書店）より



(上) 図2：ピネッテ・シュレーダー（ドイツ）
『美女と野獣』（岩波書店）より 1985年
(右) 写真②：アトリエのシュレーダー
撮影：Andrew Howcroft



図4：出久根育（日本）
『マーシャと白い鳥』（偕成社）より 2005年



(左) 図3：エンリケ・マルティネス・ブランコ（キューバ）『わたしの鷲』1991年
(右) 写真③：ハバナの街並みを眺めるマルティネス



〈館外展報告〉ピエゾグラフィ展 — 香月泰男美術館／丸亀市立資料館

今年の夏、2つのピエゾグラフィ展が日本国内で開催されました。

ひとつ目は、山口県長門市の香月泰男美術館における「香月泰男といわさきちひろ ふるさとと小さな仲間たち展」です(2013年7月26日～9月1日)。この展示は香月泰男美術館の開館20周年を記念した展示のひとつで、ほぼ同じ時代を生き、戦争を体験して平和の大切さを絵によって訴えてきた2人の画家が深い愛情をもって接し、描いた家族や身近な小さな命に焦点をあてたものです。ちひろ美術館からは、「わらびを持つ少女」、「母の日」、「すすきと夕焼け」などの、ピエゾグラフィ20点を出展し、香月泰男の「母子像」「かまきり」「会話」などの油彩や立体作品23点と共に展示されました。オー



香月泰男美術館におけるトーク

ピングの日には安曇野ちひろ美術館副館長竹迫祐子による講演とトークも行われ、2人の画家に共通する平和、家族への想いや、どちらの画風もともに見る人が自由に想像し、想いを重ねることができるといふことなどが話されました。入館者も普段に比べ、子ども連れの方が多かったようです。

もうひとつのピエゾグラフィ展は、香川県の丸亀市立資料館で開催された「ピエゾグラフィによるいわさきちひろ展 子どもたちへのまなざし」(2013年7月27日～9月1日)です。女性職員さんたちの強い希望で開催された本展では、四季のなかの子どもたち、絵本、平和への願いという3つのテーマで、ちひろのピエゾグラフィ作品45点を、複製画や資料とともに展示しました。丸亀市は全国の団扇の9割を生産しています。それにちなみ、ちひろの作品で団扇が描かれている「線香花火をする子どもたち」の複製画も特別に展示しました。

本展に際し、丸亀市内の猪熊弦一郎現代美術館、市立図書館との連携事業で、いくつかのプログラムも行われました。展示初日には、猪熊弦一郎現代美術館の

教育普及担当者とともに、同館の造形スタジオにて、水彩技法ワークショップを開催しました。また、8月4日には、ちひろ美術館顧問松本猛の記念講演「母、いわさきちひろと絵本の世界」、そして映画「いわさきちひろ～27歳の旅立ち～」の上映会が同館であり、170名を超える方々が参加。図書館ではちひろの本コーナーも特設されました。



丸亀市猪熊弦一郎現代美術館におけるワークショップ

また、展示を記念してちひろの絵を使った丸亀の特製手貼り団扇を、地元の会社といわさきちひろ作品普及会が共同開発して2種作成しました。

安曇野や東京から遠く離れた2県で、ちひろに出会う機会を与えられたことに感謝します。

(松方路子)

〈活動報告〉中学生ボランティア

●2013年7月27日(土)～8月17日(土)

夏休み期間中、地元・松川中学校の生徒が活躍する中学生ボランティア。12回目の2013年は、過去最多となる192名の生徒が参加しました。恒例の“ちひろの水彩技法体験”と絵本の読み聞かせに加え、開催中のクヴィエタ・パツォウスカー展にあわせておこなった、ワークショップと解説ツアーの様子を報告します。

パツォウスカーワークショップ

パツォウスカーの絵本に登場する、“紙の家”づくりか“サイ”のカラージュを体験するワークショップ。

“紙の家”づくりでは、大小2枚の白い画用紙を折ったり、切り貼りしたり、自由につかって紙の家をつくります。「紙はとてもおもしろい」「紙一枚で作品をつくることに、思いのほか集中した」と、



大人から子どもまで、熱中して取り組む参加者。完成した家が並ぶ“紙の町”は、日々、個性豊かな家が増えていきました。



サイの輪郭線が描かれた台紙に、クレヨンで色を塗ったり、色画用紙や和紙を切って貼り、自分だけのサイをつくる、“サイ”のカラージュ。サポート役の中学生が、「どのサイも個性的で、見て楽しい」と話すように、色とりどりの、さまざまなサイができました。



パツォウスカー探検ツアー

展示会場からちひろ公園を回りながら、中学生ガイドが作品の魅力を紹介するツアー。出身地や家族についてのパツォウスカークイズ、生徒がカラージュでつくったサイの紹介、描かれたピエロの帽子を着せ替えながら色づかいの説明を聴くなど、盛りだくさんの内容です。ツアーでは、通常公開していない美術館のバックヤードも“探検”。美術品輸送専用のトラックがつけられる、作品搬入口のシャッターがあがるなど歓声がわき起こります。「一生懸命な説明に感激。パツォウスカーのファンになった」「画家に親しみを持った」と話す参加者に、



「お客様の顔を見ながら話すのが楽しい」「台本どおりではなく、工夫して説明できた」と、ガイドたちも満足そうな笑顔を見せていました。

(水谷麻意子)

後援：長野県教育委員会、松川村教育委員会

ちひろを 訪ねる旅⑤

東京府立第六高等女
学校



裁縫室 ミシンを使うちひろたち



第六高女自慢の室内プール

1931年(昭和6)4月、12歳のいわさきちひろは東京府立第六高等女学校に入学します。ちひろの母文江は、25年(大正14)からこの第六高女で教鞭をとっていました。

第六高女創設の1923年(大正12)以来41年(昭和16)まで、校長をつとめたのが丸山丈作、ちひろ在学時の校長です。丸山は、1875年(明治8)新潟県頸城生まれ。東京高等師範学校を卒業後、香川、新潟の師範学校教諭、東京府立第三高等女学校教頭を歴任し、41歳で新設第六高女の校長になりました。就任後は持ち前の合理主義、実践主義で、旧来にはない革新的で独創的な女子教育に取り組みます。

最も力をいれたことが、体力つ

くり。丸山は、校医による健康チェックのほか、歯科検診も実施。また、個々の力にあわせて往復3里、5里、7里、10里を歩く「適応遠足」を年1回行いました。ちなみに、ちひろはいつも10里を歩いたといえます。夏は、信州の槍ヶ岳登山、冬は妙高高原でのスキー教室。また、海洋国日本の未来は海にあるとの考えから、母となる女性たちも水に親しめるようにと、府からの予算は求めず独自に寄付を集めて、国内屈指の本格的な室内プールを建設しました。ここには、オリンピック選手の前畑秀子も、練習に通ったといえます。

活動的なジャンパースカートの制服を考案し、まだ抵抗の多かつ

た女学生の断髪も衛生的だからと積極的に認めました。通知表は本人や家族が希望しない限りは渡さず自発的な学習を促し、必要な資材はミシンも顕微鏡もドイツ製の最高級品を2クラス分揃え、ピアノもドイツ製のスタインウェイを入れました。また、女性は結婚するとなかなか旅行にも出かけられないからと、1年生は日帰り、2年生は泊まりで日光、3年生は北海道へといった修学旅行を実施。帝国ホテルのフルコースで、テーブルマナーも学ばせました。

ちひろは、丸山校長の自主性を重んじる自由な校風のもと、良質の文化を享受し、恵まれた女学生生活を送りました。(竹迫祐子)

ひとこと ふたこと みこと



5月19日(日)

1965年ごろ、買ってもらった童謡集のレコードの挿絵に、ちひろさんの絵がありました。ゆりかごの歌に添えられた、画面いっぱいのびわの実のオレンジ色。やわらかいあたたかい色が大好きになりました。そのときから大ファンです。ずっと、楽しませてください。(千葉県 S)

6月25日(火)

ちひろさんの画集は何冊か持っていますが、原画を見るのは初めてです。子どもの世界を描く人は、やはり人間のことを深く愛している人なのだ。「戦争」や「平和」についても、絵を通して考えました。(大阪府 K.Y)

7月14日(日)

ちひろさんの技法から、世界の絵

本画家の技法へと、広がりが見えた。技法を意識して見ることでよかったです。「色の音・紙の詩」とはうまい!

7月31日(水)

ワークショップ、楽しかったです。3色の色でまぜ合わせて、いろいろな色がつくれるって、楽しいです。またやりたいです。

8月2日(金)

今回の目的は、パツオウスカーの作品に触れることです。赤を基調に、自由な発想で取り組むスタイルに、新しい世界を見ました。地元中学校のボランティアの、すがすがしい姿に、ワークショップを楽しみました。(S)

8月2日(金)

私は、ちひろさんの絵に感動しました。こんなに、絵が「人を喜ば

せる」とか、「気持ちをおちつかせる」のか、と心から思いました。私にとって、ちひろさんは「大切な人」です。なぜかという、私は小学五年生なのですが、いつも国語の教科書の一番前のページにのっているからです。私は、いつもちひろさんの絵を見ています。(H.I)

北海道立近代美術館

いわさきちひろ展(4/27~6/2)

感想アンケートより

耳を澄ますと息づかいが聞こえてきそうな、指に触れると体温を感じるような、一見はかなげな水彩の絵ですが、絵のなかの子どもの強い生命力に心打たれます。その絵のなかに、息子を見て、娘を見て、幼い日の私を見ました。

美術館 日記



6月14日(金) ☀

遊牧民の暮らしを描いた絵本で国際的な絵本賞を受賞しているモンゴル出身の画家ボロルマー・パーサンスレンさんが来館。大らかであたたかい人柄は、作品から受ける印象そのまま。ご夫妻でゆっくりと展覧会を楽しまれた。

6月30日(日) ☁

開催中の「ちひろの子ども歳時記」展に関連し「わらべうたあそび」を開催。講師は松本市でわらべうた遊びを広める活動を行う杉田祐香さん。日本に古くから伝わるわらべうたにあわせ、初対面の人でも手をつないで輪になると、自然と笑顔に。



7月20日(土) ☀

韓国での絵本美術館建設プロジェクトのリーダーとして、世界各地を巡り、美術館運営や展示について学んでいるハン・ミョンヒさんが、研修のために、約2週間の滞在。当館の研修の前後にも他の絵本美術館や展覧会を精力的に訪れ、勉強していたハンさん。困難があっても「子どもたちの幸せと平和のために」と、絵本美術館建設に取り組む姿勢に、スタッフも刺激を受けた。

7月27日(土) ☁

大盛況だった北海道立近代美術館での展示を終え、岩手県立美術館での「いわさきちひろ展」が始まる。本日はWS「チャレンジ!ちひろの水彩技法」を行う。4回開催し、親子連れを中心に約130名もの方々が参加された。「にじみ、

白抜きと2つの技法を体験できてよかった。絵への理解が深まった。」とうれしい声が寄せられた。

7月28日(日) ☀

「クヴィエタ・パツオウスカー展」に関連し、絵本カフェにてパツオウスカーの85歳の誕生日メニューを提供。チェコ在住のご本人からいただいたレシピをもとに味を再現したスープ、東欧の家庭料理のアイスバイン(塩漬煮豚)、ライ麦パンのセット。お客さまからは「遠いチェコの生活や文化の薫りを味わえてよかった!」と感想をいただいた。



安曇野ちひろ美術館 イベント予定 各イベントの予約・お問い合わせは、安曇野ちひろ美術館へ。
 詳細・最新情報はホームページからもご覧いただけます。 <http://www.chihiro.jp/> TEL.0261-62-0772 FAX 0261-62-0774

● **絵本作家・武田美穂によるトークとワークショップ**

共催：松川村公民館・図書館、松川村青少年育成村民会議家庭教育部会

○ トークイベント

『となりのせきのますだくん』シリーズなど、子どもたちに大人気の武田美穂の絵本。子どもたちには共感を呼び、大人には懐かしさを感じさせます。絵本との出会いにまつわる思い出や、独自の絵本づくりについて、子どもたちに届けたいことなどを語ります。



武田美穂 『となりのせきのますだくん』(ポプラ社)より 1991年

日時：10月13日(日) 15:30~17:00
 会場：安曇野ちひろ美術館 多目的ギャラリー
 料金：無料(入館料別)
 定員：70名
 申し込み：要事前予約(ちひろ美術館HP、TEL.0261-62-0772にて受付)

○ 子どものためのワークショップ

日時：10月12日(土) 13:00~15:00
 会場：松川村多目的交流センター すずの音ホール
 講師：武田美穂
 料金：無料
 対象：幼児~小学生
 定員：30名
 申し込み：要事前予約(ちひろ美術館HP、TEL.0261-62-0772にて受付)
 ※松川村図書館でも、TEL.0261-62-0450と来館にて、申し込みを受付

● **秋の夜長の安曇野寄席**

共催：松川村社会福祉協議会

毎年好評の安曇野寄席も12回目。秋の夜長のひとときを、落語でお楽しみください。

日時：10月27日(日) 18:00~(開場17:30)
 会場：安曇野ちひろ美術館 多目的ギャラリー(予定)
 出演：三遊亭時松、遊興亭福し満 ほか
 料金：無料(開館時間内に館内見学をする場合、要入館料)
 定員：80名
 申し込み：要事前予約(ちひろ美術館HP、TEL.0261-62-0772にて受付)

● **安曇野スタイル2013 ちひろの暮らし展**

「ちひろのアトリエー東京・黒姫ー」展に関連し、ちひろが暮らしたころから、時代を超えて愛され、受け継がれてきた工芸品の数々を展示・販売します。

日時：11月1日(金)~11月4日(月・祝)
 会場：安曇野ちひろ美術館 多目的ギャラリー ほか



2010年安曇野スタイル会場風景

○ パントマイムの夕べ
 日時：11月2日(土) 17:30~18:15 (閉館18:30)
 出演：藤森まさやす(パントマイミスト)
 料金：500円(ワンドリンク付き)
 定員：40名
 申し込み：要事前予約(ちひろ美術館HP、TEL.0261-62-0772にて受付)

● **ちひろが愛した安曇野・まつかわ北アルプス パノラマウォーク**

主催：松川村観光協会/協力：安曇野ちひろ美術館

ちひろの両親が戦後、開拓農民として暮らした松川村(美術館所在地)は、ちひろが心の故郷として愛し、折に触れて訪れては、数々のスケッチを残した場所です。ちひろのスケッチポイントや遺跡、りんご園、北アルプスの眺望が楽しめる遊歩道を巡るウォーキングイベントを開催します。松川村のガイドによる案内や当館スタッフによる解説のほか、クイズラリー、りんごジュースの振る舞いなど、村民によるおもてなしもあります。安曇野の秋空の下、お楽しみください。

日時：2013年10月6日(日) 9:00~13:00(受付開始8:30)小雨決行
 集合・解散場所：安曇野ちひろ公園
 参加費：1000円(保険料込み)
 申し込み：要予約
 申し込み先：松川村観光協会 (TEL.0261-62-6930)
 定員：100名
 コース：10km(約8kmの短縮コース有) 神戸原より後立山連峰をのぞむ 1950年
 安曇野ちひろ公園→桜沢遺跡→鼠石→市川農園→舟方遊歩道→安曇野ちひろ公園



● **ちひろの水彩技法ワークショップ vol.2**

ちひろ作品の特徴である「にじみ」の水彩技法を体験するワークショップです。今回は、「秋の巻」と題し、2回開催します。

秋の巻① にじみで秋のカードをつくろう
 日時：11月17日(日) 11:00~、13:00~、14:30~(所要時間各50分)
 爽りの秋、食欲の秋、スポーツの秋……、あなたの「秋」をカードにし、ちひろの切手で、大切な人に送りましょう。
 秋の巻② にじみでしおりをつくろう
 日時：11月30日(土) 11:00~、13:00~、14:30~(所要時間各50分)
 カードづくりを応用して、読書の秋にぴったりの、すてきなしおりをつくります。ラミネート加工をするので、しっかりしたしおりになります。

会場：安曇野ちひろ美術館
 料金：300円(材料費込み)※入館料別
 定員：各回10名
 対象：どなたでも参加できます
 申し込み：当日予約受付(各回先着順)

● **おはなしの会**

毎月第2・4土曜日
 11:00~
 参加自由、入館料のみ。

● **ギャラリートーク**

毎月第2・4土曜日
 参加自由、入館料のみ。
 14:00~ちひろ展
 14:30~世界の絵本画家展または企画展

● **冬期休館のお知らせ**

2013年12月1日~2014年2月末日まで、安曇野ちひろ美術館は冬期休館いたします。2014年は3月1日(土)より開館します。

● **2014年安曇野ちひろ美術館 展示予定 2014年3月1日(土)~5月13日(火) ※休館日あり。展示会タイトルは変更する可能性があります。**

〈展示室1・2〉 絵童話「窓ぎわのトットちゃん」展 | 〈展示室3・4〉 ちひろ美術館コレクション | 〈展示室5〉 絵本の歴史

CONTENTS

〈展示紹介〉 ちひろのアトリエー東京・黒姫ー/ちひろ美術館コレクション 画家たちのアトリエ…②③
 〈館外展報告〉 ピエゾグラフ展 — 香月泰男美術館/丸亀市立資料館 〈活動報告〉 中学生ボランティア…④
 ちひろを訪ねる旅51/ひとことふたことみこと/美術館日記…⑤

美術館だより No.76 発行2013年9月20日

安曇野ちひろ美術館